慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	抗日戦争初期における重慶の新聞雑誌事情と小説「南京」
Sub Title	The novel "Nanjing" and the situation of Chongqing press in 1939
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.235- 254
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

抗日戦争初期における重慶の新聞雑誌事情と小説「南京」

関根　謙

1、阿壠の「南京」が示す問題

阿壠の長編小説「南京」は、中国人作家が一九三七年の南京陥落を扱った最初の作品である。原稿は一九三九年十月、南京陥落から一年十ヵ月後に完成した。これより早く三八年には、石川達三が『生きている兵隊』を、火野葦平が『麦と兵隊』をそれぞれ発表している。小説「南京」は当時、重慶国民政府の統一戦線文芸雑誌「抗戦文芸」主催の長編小説公募で賞金を与えられた作品ではあったのだが、このとき正式出版には至らなかった。刊行は作品完成から半世紀後の一九八七年、書名は『南京血祭』と改題されていた。しかもこれは原作そのものの出版ではなく、執筆用のノートに書かれた原稿を基にしたもので、三十万字あったという長さも原作の半分以下に削除された上での刊行だった。見るも無残な出版というべきだろう。

刊行された『南京血祭』は九章とエピローグからなる作品で、南京陥落直前十一月の状況から陥落当日までが描かれており、エピローグには陥落後の象徴的な戦闘の意義が述べられている。これはいくつものエピソードを重ねる形で書

かれた作品で、もちろん日本侵略軍の悪逆が怒りを込めて描かれていたが、それと同時に、当時の南京防衛軍内部の問題も鋭く抉り出されていた。また市民の生活や感情、知識人と農民間の矛盾とその克服の過程、中国人の覚醒の実態なども描きこまれていて、南京陥落の真の意味を問う作品であった。作者阿壠は日本との戦いの只中にいる戦闘者・軍人として、戦闘の勝利への道の確信に燃えながら、直面した敗北の意義を闡明しようとしたのだ。

この作品の詳細とその文学史的意義に関してはすでに数編の拙論があり[1]、ここでは繰り返さないが、一般的に言って、高い評価が行われ始めているといっていい。特に詩論に対する北京の孫玉石の評価と散文に対するアメリカの Yun-zhong Shu の評価は、阿壠の文学史上の位置を模索する上で非常に重要だと思われる。小論では、こうした阿壠の文学的才能と達成を前提に、なぜこの歴史的作品「南京」が当時すぐに刊行できなかったのかについて、この数年間私が脳裏に描いてきた推論を述べてみたい。

はじめに阿壠の経歴を確認しておく[2]。阿壠（本名陳守梅）は一九〇七年、杭州に生まれた。少年時私塾で文才に目覚めるが、救国の夢を抱き親の反対を押し切って上海の中国公学大学経済系に進んだ。三三年、戦況の悪化を受け、軍人となることを決意した阿壠は国民党の黄埔軍官学校歩兵科に入学、三六年に卒業、陸軍第八十八師団少尉となる。三七年八月、上海防衛戦に小隊を率いて出撃、しかし十月の戦闘中に顔面を銃撃され重傷を負って大後方に撤退する。このころから胡風の雑誌「七月」に戦闘のルポルタージュを投稿しはじめ、胡風の知遇を得る。その後長沙などを転々としながら、胡風の友人で周恩来秘書だった呉奚如のルートから革命根拠地延安に入り、共産党の抗日軍政大学に学ぶことになる。しかし軍事演習中に今度は眼球を負傷し、治療のために西安に退く。長編小説「南京」は延安で前二章に着手していたが、その後のすべての章を、この西安で七月から十月までのわずか数ヶ月間という短い期間のうちに書き上げた。翌年、治療を終えた阿壠は、延安には戻らず、重慶に向かう。胡風や呉奚如の勧めで国民党軍部中枢へ入る道を

選んだのだ。肩書きは国民党軍事委員会政治部軍事処第二科付少佐、まもなく軍令部少佐参謀となる。四四年、陸軍大学に再入学、卒業後成都陸軍軍官学校の戦術教官となる。阿壠にはSM、亦門など夥しい数のペンネームがあるのだが、それはこういう状況下で次々と反蒋介石軍の戦闘的なエッセイを発表したからだ。共産党側にも、先ほどの胡・呉ルートを使い国民党軍部の高級軍事情報をリークしていた。やがて密告者によりこうした秘密の情報漏洩が発覚し、四川を脱出しなければならなくなる。この間、阿壠は成都で文学好きの若い女性張瑞と結婚し、男の子も儲けたのだったが、若妻瑞は複雑な事情により服毒自殺をしてしまう。失意の阿壠は国民党の指名手配を逃れて江南を巡り、やがて陳君龍という変名を使い南京気象台に職を得た。その後、重慶のほとぼりの冷めるのを待って、南京の陸軍大学兵学研究院に中央研究員として入学、後に四八年には陸軍参謀学校で教官となった。このときに阿壠は昇進して大佐になっている。四九年以後は一人息子陳沛と共に天津に住み、天津文壇の指導者のひとりとなる。ここで阿壠は大著『詩と現実』を出版し、活発な文芸評論を展開した。しかし五五年、胡風事件に連座、胡風反革命集団の指導者の一人として十二年間監禁され、六七年に天津監獄で病死した。

阿壠の経歴はきわめて複雑で、特に獄死にいたる十二年については、ごくわずかしか知られていない。確実に振り返られる文学の業績では、詩人、小説家、ジャーナリスト、編集者、文芸評論家、というように広範なジャンルに及んでいる。阿壠についてはまだまだ研究しなくてはならない事が残されていると言わねばならない。

2、文芸誌「抗戦文芸」の長編小説公募とその顛末

阿壠は、西安に治療のために退いた時、長編小説「南京」を完成した。石川、火野という二人の日本人作家が「南京陥落」をテーマにした小説をすでに発表してしまったということに対する憤激（特に従軍作家・陸軍報道部員火野に対

する憤激は強い）と中国軍人であり作家である自身の使命感に燃えて、阿壠は一気にこの長編を書き上げたのだ。阿壠はこの時期、何よりも中国軍人であった。上海線で負傷するまでの事はすでに述べたが、彼は撤退先の長沙などで、入手可能の公的な新聞資料ばかりでなく、同僚だった将兵からの伝聞やさまざまな情報をもとに、南京陥落の真相に迫った。もちろん限られた情報であり、全面的な解明にはほど遠いものではあったが、この時期の中国知識人の持ちうる情報としては、最高のものだったことは確かである。阿壠の長編小説のデータはこうして整ったのだ。その後、「抗戦文芸」誌が長編小説の公募を行なっている事を知って、阿壠は「南京」を応募作品として投稿した。「抗戦文芸」は三八年に組織された「全国文芸界抗敵協会（文協）」の機関雑誌で、老舎、郁達夫、胡風など錚々たるメンバーが名を連ねていた。胡風は研究開発部門の責任者で、この公募の中心的な役割をになう人物だった。後の出版となる『南京血祭』の後書きでは、阿壠は胡風から励ましと創作上の助言を受けていたと記述しているが、胡風の回想録[3]では、この段階で胡風は阿壠の創作についてまったく知らず、長編小説公募に作品を提出した事も、もちろん知っていなかった。胡風が阿壠のこの小説を初期段階では知らなかったということは、以後の事態の展開上とても重要である。

実は、この公募については、関係者の回想録などの証言に頼るしか追跡ができない。というのは、公募自体が編集部によってキャンセルされたからだ。胡風の回想録、および夫人梅志の回想録[4]によると、事の顛末は次のようである。

応募作品の選考委員会は、阿壠の作品を確かに受け付けたが、選定作業中に、委員の一人であった孔羅蓀が好奇心に駆られて、封印された作者の名前を見てしまった。委員会は公平選考の原則の元で作業しており、作者名は匿名にされていて、委員はそれを知ってはならないことになっていた。阿壠の名前は孔羅蓀から他の委員にも知らされ、阿壠が胡風の知人で、胡風の雑誌「七月」の常連投稿者であることが皆の知るところとなってしまった。公平の原則に基づく厳粛な公募はこうした「不注意」によって泥を塗られ、結局、この公募自体をキャンセルしなければならない事態に

なった。しかしこうした不始末の起こる直前まで選考の査読は進んでおり、この段階で、委員たちは皆阿壠の小説を第一席とすることで一致していた。阿壠の作品に対する高い評価は、この段階ですでに確定していたのだ。そしてこの「不始末」の妥協案として、阿壠には賞金、四百元が渡されることになった。表面化されはしなかったが「抗戦文芸」誌スタート時におけるスキャンダルといってもいい事件だったのである。

梅志もこの問題について同様の証言をしており、国民党系新聞社が、この公募の第一席に選ばれた作品を出版すると申し出ていたという。しかし、幻の第一席作品が左翼文芸誌「七月」と関係の深い作家のものだということがわかって、出版計画はうやむやのうちに消えてしまった。

また、阿壠の『南京血祭』を出版するために奔走した緑原（詩人、阿壠の友人）[5]によると、この作品が当時出版できなかったのは、阿壠が戦闘の真実の姿と残酷な死をあまりにもリアルに描写しすぎたからだという。国民党政権下おける言論抑圧を匂わせる発言である。

一見非常に理路整然とした説明なのだが、阿壠の作品がそれほど高い評価を持っていたとなると、どうしてもいくつかの疑問が湧いてくる。まず、第一に、関係者たちはなぜ、この作品の出版を考えなかったのかということである。胡風自身も、「七月」を冠にしたアンソロジーや個人集、詩集などの出版を行なっていたし、他の出版社に依頼することも考えられたのではないか。第二に、孔羅蓀ほどの名のある文学者、編集者が、なぜこのようなばかげたミスを犯したということである。彼は巴金との親交も篤く、新中国の文壇でも重鎮的存在だった。しかも、これは「抗戦文芸」という正式な機関紙の公募選考作業であり、学生の同人誌の編集とはわけが違うのである。よほどの理由がない限り、これほど不名誉な初歩的ミスは犯さないだろう。第三は出版を申し出ていたという国民党系新聞社（胡風と梅志は国民党中央軍機関紙「掃蕩報」としているが、邦訳『胡風回想録』の注釈でも触れられているように記憶違いで、正しくは国民

党機関紙「中央日報」）の問題である。第一席の作者と「七月」の関係が明白になったがゆえに、この新聞社の申し出ていた出版計画が立ち消えになったというのだが、問題の左翼雑誌「七月」の編集責任者胡風が「抗戦文芸」の編集委員であり、研究部門の責任者である事は、公然たる事実だったはずだ。選考に胡風の意見が反映されると見るのは、当時の文学界にあっては、意外でも何でもない当然のことなのだ。

この三つの疑問は、阿壠個人の事情、あるいは胡風ないし孔羅蓀など「抗戦文芸」側の個別な事情によって、解答が与えられものではない。もっと総合的な「時代」を見る視線が必要なようだ。

この問題の切り口として、文芸誌「抗戦文芸」の公募公告関係の確認しておこう。これはこれまでなかなか入手できなかったのだが、重慶図書館歴史文献センターに、その全巻が保管されていることがわかり、このほどようやく当該部分を確認できた。「公募公告」は第四巻第三、四期合刊（雑誌原本が破れていて発刊年月日が読み取れなかった。他の資料でも明記されていない。ただ前後の号から見て一九三九年初夏から九月までの発行であることは間違いない）に大きく掲載されていた。

「文協・作品公募公告」一、応募作品は十万字以上の創作小説で、当選一作品を本会の組織専門委員会により決定する。一、題材に関しては、（一）前線における戦闘情勢、あるいは（二）敵占領区における生活動態、あるいは（三）後方における生産建設の進展過程のいずれかとする。一、当選者には賞金一千元を与える。一、原稿締め切りは今年十月末までとする。原稿送付先は重慶（郵政）箱二三五号、外地から郵送する際には、消印の期日有効とする。一、当選者決定後、本人に通知するほかに、新聞公告を行なう。できうる時に表彰式を行なうが、これは遅くとも来年二月までには挙行することとする。

「説明」：1、今回の公募は、本会が貴陽中央日報社と宜昌武漢日報社の依頼を受けて行うものであり、賞金はこの両社によって醵出される。ただし、選考の責任は完全に本会に属するものである。2、当選作品には賞金が与えられるが、版権はやはり作者が保有するものとする。しかし貴陽中央日報社と宜昌武漢日報社には優先的な発表権があるものとする。紙上にて発表する際には別途発表費が支給され、これは毎月月末に支払うものとする。3、当選作品の紙上発表が決定された場合、貴陽中央日報社と宜昌武漢日報社はこれを同時に連載するものとする。しかし連載期間は三ヶ月を越えてはならない。連載終了後、作者はこれを単行本として出版販売することができる。ただし、その際、表紙およびカバーに「中華全国文芸界抗敵協会公募当選作品」という文字を書き込み、あわせて本会に計百部を贈呈しなければならない。4、もし当選者のほかにも優秀な作品があったなら、本会はこれをも表彰し、あわせて作者の出版の援助を行う。5、応募者は姓名（本名）、発表の際使用する筆名、信頼できる通信住所、作品のタイトル、および簡単な創作経過などを別紙にまとめて明記し、原稿に同封して提出すること。原稿のいかなる部分にも、作者の姓名を書いてはならない。郵送の際の包装紙には「公募小説作品」と明瞭に書き記すこと。6、原稿は浄書して、句読点なども明記されてなければならない。7、戦争中のことであり、交通通信が困難で、後方も空襲の危険を免れないから、作者は必ず別途原稿を保管し、郵送の際は書留郵便とすること。8、本会は原稿を受領後、受け取り確認の返信は出さない。しかし選に漏れた作品は作者に返還する。

ここから、この公募に対する文協の並々ならぬ期待と意気込みが感じられよう。また「当選一作品」の賞金が千元だったこと（『胡風回想録』では一位から三位までの賞金総額とあった）、「中央日報」など二つの新聞社がスポンサーだったこと、匿名公募の原則の執拗なほどの強調、佳作にまでも出版援助を申し出るほどの出版への非常に高い期待な

どが明瞭に伝わってくる。その後、第六巻第一期（民国二九年三月三〇日発行）に「会務報告（総務部）」の中で「研究部の活動報告」があり、そこでこの公募の途中経過が触れられている。

研究部の今春もっとも忙しい仕事は、貴陽中央日報社と宜昌武漢日報社に代わって行なっている公募小説の審査である。二月の末までにまだ十作品しか受け取っていないが、その字数は全部で百五十万字から百六十万字にも及んでいる。研究部は審査方法を決定しており、それはすでに理事会の批准を得ている。さらに審査委員も推薦決定しており、この三月中旬をめどに査読を終了し、年次大会において当選者の表彰と賞金授与が行なえるよう選考活動を進めている。

後の資料でわかるのだが、阿壠は二番目の投稿作品であり、この百五十万字という総作品字数からみると、阿壠の原作三十万字というサイズが際立って大きかったことがよくわかる。圧倒的な長編だったのである。また研究部が選考を担当していることも明示されている。研究部責任者として、郁達夫、胡風、鄭伯奇の三名の名は本誌に何度も出ており、公募と胡風の関係は歴然たるものがあった。たとえば「研究部報告」（第四巻第一期、民国二八年四月一〇日）には「主任……郁達夫、胡風、鄭伯奇、工作状況」という小見出しで「研究部の状況は二つの段階時期、武漢時期と重慶時期、に分けて考えられる。武漢時期には主任郁達夫胡風以外に魏孟克、邢桐華、羅蓀らを幹事として招聘し、活動の活性化を図った……」などと記載されていた。ここから、主任胡風とともに、孔羅蓀が期待される活動家であり十分に信頼されていたことも読み取られよう。

「抗戦文芸」はその後二度、途中経過を報告している。

「文芸簡報（記者）」中華全国文芸界抗敵協会は武漢日報社（ママ、貴陽中央日報の名なし）に代わって長編小説公募選考作業を進めており、第一陣の十作品の査読がすでに終了した。その後引き続き六作品の応募があり、現在、個別に査読を進めている。（第六巻第二期、民国二九年五月一五日）

「会務報告（総務部）」（六）小説公募：本会は貴陽中央日報社（ママ、宜昌武漢日報社の名前なし）の委託を受けて抗戦長編小説の公募および審査を行なっているが、現在十九作品の応募があり、そのすべての審査を終了した。結果は文協改選大会において発表する。（第六巻第四期、民国二九年一二月一日）

時が経つにつれて「小説公募」の扱いが小さくなっており、最終的には、次の報告となるのである。これは後ろのほうの頁（五十七頁）の最後に横組みで組まれた簡単もので、公募の最終報告といったタイトルさえついていなかった。

「文芸簡訊（署名なし）」（第二段落目に）貴陽中央日報社（ママ）の委託を受けて、文協は公募長編小説の選考を行なってきており、これまで前後して十九作品の応募があったのだが、組織委員会の選考評定の結果、当選作品なしという結論に達した。原作は返還され、賞金は貴陽中央日報社がこれまでどおり保管することとなった。ただ、応募作品中、応募番号2番のSM君の『南京』、応募番号16番の陳瘦竹君の『春雷』は実に優れた作品（「実為佳作」）なので、本会より原稿料（筆潤）としてそれぞれ四百元を贈ることになった。（第七巻第一期、民国三〇年一月一日）

これが公募の最終結論だった。SMはもちろん阿壠のペンネームの一つである。「筆潤」四百元は、当時の金額としてはやはり破格のものだったといえる。阿壠は後日、この金額が二度にわたる負傷の治療のために大変に役立ったと言って、胡風に深く感謝している。しかしそれにしても、当初の期待と意気込みから見ると、大きな後退だった。ここで阿壠と共に賞金を受けた陳瘦竹について確認しておく必要がある。[6] 陳瘦竹は英文学を専攻した翻訳者でもあり、ワーズワースやバーナード・ショーに関する論著もある学者肌の人物である。この『春雷』は江南での抗戦と反売国奴の闘争を描いたもので、四一年に重慶で出版され、後に戯曲『江南の春』と改題されて、当地で上演された。好評を博したという記述もあった。小論の立場からすると、『春雷』だけが出版されていたという事実は、実に興味深い。各種の回想録であれほど実力の認められていた「南京」は結局出版されなかったのである。まったく対照的な出来事と言わざるを得ない。

こうして実際「抗戦文芸」を確認してみると、先に挙げた三つの問題はいよいよ不思議になってくる。次に、この当時の重慶メディアの状況を確認しておこう。

3、戦時首都重慶の新聞・出版界の状況

一九三六年十月の魯迅の死以後、「二つのスローガンをめぐる論争」は、周揚の主張していた「国防文学」路線に収斂されていく。これは共産党の側から言えば、国民党のとの統一戦線を第一義とする方針の堅持を意味する。西安事変を経て一九三七年には、この統一戦線政策が明確な姿を現し、侵略者日本との全面戦争に対する体制が整えられていく。そして押寄せる日本軍を前に、十一月には国民政府の南京からの撤退が決定され、武漢を経て重慶が戦時首都となるの

だ。政府撤退の翌月、南京は陥落した。

一方重慶は、この頃までに政治的経済的な中心地としてにわかに活気付いていった。抵抗する中国の文化的中心地となったことも言うまでもない。抗日統一戦線の旗印のもと、多くの文学者が重慶に集まってきた。もちろん共産党員もいれば、共産党シンパもいて、著名な作家も続々と集結したのだ。巴金、老舎、そして郭沫若などのビッグネームもこの時期に重慶で要職に就いた。共産党の統一戦線政策は、着実に根付いていったといえる。

重慶政府時代の文化状況を記した資料『抗日時期的重慶新聞界』[7]によると、重慶の新聞界はこの時期、共産党と国民党が非常に優れた協力体制を敷き、紙面づくりや取材のみならず、新聞用の紙や活字の融通まで快く積極的に行っていたという。共産党の「新華日報」社長潘梓年が重慶に赴任した際、何よりもまず手始めに、国民党の新聞社など重慶各社との交流会に駆けつけたという逸話も紹介されている。日本軍の重慶空襲で戦況が悪化した三八年には、国民党も共産党も独自の新聞経営を中止し、重慶十大紙共同編集の統一新聞「聯合版」を発行したこともあった。

一般的に、国民党といえば言論抑圧と発禁の連続といったイメージが文学史では定着しているが、この重慶の時期は、それは当てはまらない。つまり、長編小説「南京」の出版問題という見地から言えば、この時期政治的に弾圧される理由は見当たらないということになるのだ。少なくとも、国民党の言論統制が小説の発行を阻む第一要因ではなかったという点は、押さえておく必要があるだろう。また著名な左翼系文学評論家・ジャーナリスト胡風がいたから、国民党側から睨まれたと言うのも当たらない。胡風自身この時期、国民党の「中央日報」に寄稿して、自己の見解を述べたことすらあるのだ。[8]

重慶は国共両党の蜜月時代だった。上層部の真意はともかく、都市の文化状況はまさに友好協調ムードが溢れていたのだ。こうした統一戦線政策の文化面における現れには、明瞭な特徴があった。それを当時の紙面から見てみよう。

この時期の重慶各紙の論調には、統一戦線政府の優れた見識、国民革命軍の奮戦、英雄的事跡、日本軍のモラル的敗北などを強調する傾向が見られる。共産党の「紅軍」がこの時期、国民党軍との統一指揮系統に組み込まれ、「八路軍」「新四軍」となったことは共産党の統一戦線に対する並々ならぬ決意をあらわす出来事であった。南京陥落から二週間後、一九三八年元旦の紙面[9]には、蔣介石委員長の指揮下に団結しなければならないという共産党側の主張が大きく載っている。共産党に対する国民党からのエールも際立つ。たとえば「中央日報」はこの年、長編旅行記「ソ連紀行」をロングラン掲載したし、翌三九年にはスターリンのソビエト共産党十八回大会に対する報告全文も掲載した。「ソ連紀行」はもちろんソ連を賛美するもので、反共の宣伝のためのものではない。思えば、最初のソ連邦旅行記『餓郷紀程』を書いた瞿秋白は、つい数年前にこの新聞の経営者国民党政府により処刑されていた。親友を救うために奔走した魯迅がもし後二年生きていて、この状況を見たらいったいどう思っただろう。

こうした統一戦線に対する賛美の傾向と共に、無視できないのは、戦闘的気運の高揚を目指す記事が多いことである。戦勝の記事、勝利への確信の記事が繰り返されるのだが、その一方で、敗北や混乱の報道はほとんどなされていない。それは、「南京事件」の報道に端的に現れている。先にも触れたが、三八年元旦とは南京陥落の二週間後のことであり、南京で虐殺はまだ横行していたのだ。このとき、郭沫若の主宰するこの新聞は、まったくこれに触れていない。「中央日報」もそうであり、「新華日報」も基本的に同じである。南京はときおり小さな報道記事の中で触れられるか、あるいは、海外からの報道として翻訳されて触れられるだけだ。それはたとえばアメリカの上海での新聞「大美晩報」(Shanghai Evening Post and Mercury)や「密勒氏評論報」(The China Weekly Review)などに掲載された記事を翻訳して伝えるという形である。しかし「南京事件」を扱った先の石川と火野の作品は、すぐに翻訳されて出版された[10]。阿壠が読んだり聞いたりしたのは、この翻訳を元にしているのだ。胡風の回想録にも、船中で火野の『麦と兵隊』を読んだ感

想が記されているが、胡風は当時鹿地亘の推薦したこの作品に反感を抱いて、「退屈きわまりない作品」だったと書いている。

「南京事件」に対する中国新聞界の姿勢は、今から見るときわめて異様だが、戦意高揚のために敗北と壊滅は語らないという暗黙の了解が、知識人の間にあったというのは言いすぎだろうか。一歩進めて言えば、共産党も国民党もこの事件に対するコンセンサスを持っていなかったのだ。これがはっきりするのは、日本侵略軍敗北後の極東軍事裁判を待つしかない。知識人は共産党の正式見解が出る前に、先走って記述することを意識的に避けてきたのだ。翻訳という形での発表には、事件を早く伝えたいという善意の精神が働いていたことは間違いないが、文責を原作者に負わせ翻訳者の責任を相対的に軽くする意識が働いていたのではないかという疑念もふと浮かんでくる。

阿壠は、最初の長編小説の原稿を、それまでの逃亡生活の混乱の中で紛失していた。ただ、乱雑な走り書きの原稿ノートのみ保管されていて、これが八七年の出版のもとになるのだ。この間、四七年に胡風から「南京」を整理し書き直して出版に備えるようにアドバイスを受けたのだが、それはちょうど「南京事件」の概念が固まる時期でもあった。実際阿壠はこのときに胡風に従って原稿を書き直すのだが、この修正原稿も国共内戦の時期に失ってしまい、以後、彼は自分でこの小説に手を入れることはなかった。ちょっと先の話をしてしまったが、話を一九三九年に戻すと、長編小説「南京」を取り巻く環境は、きわめて好ましくないものだったのだ。阿壠の小説は、日本軍の残虐を描写するばかりでなく、戦闘の真実の姿を伝えようとする中で、国民党軍の腐敗、国民政府蒋介石の戦略的失敗、戦術の混乱、退廃的な国民性にまで触れていた。はっきり言って、この時代の要求する戦時小説ではなかったのだ。

重慶という戦時首都のこうした特殊な状況を踏まえた上で、次に、もう一つ別な角度から「南京」出版不能問題を考えてみたい。

3、郭沫若と胡風

一九三八年から四〇年代の初めまで、郭沫若と胡風の間に、執拗な論争があった。[11] それは抗戦時期の文化の「普及」と「向上」をめぐる論争で、口火を切ったのは郭沫若だった。一九三八年一月、郭沫若は「抗戦と文化問題」というエッセイの中で、現在中国に必要なのは、文化の「普及」であり、それもパブロフの「無条件反射」のように、敵日本に対して反射的に抗戦を組織し動員するような体制を築かなければならないと主張した。そして、文化の質の「向上」を唱えて高尚な論理にばかり走るような知識人達は、当面する普及の任務を軽視するばかりでなく阻害さえするような連中であり、その態度は「非国民的」であって、甚だしきは「利敵行為の嫌疑（資敵嫌疑）」があると見られても仕方がないと断じたのである。

これに対して胡風は、後に「持久抗戦中の文化運動を論ず」としてまとめられた三篇のエッセイの中で、名指しこそしなかったものの明らかに郭沫若のエッセイを踏まえて、徹底的な反撃をした。特にその三にあたる「普及も向上も必要」の中では、実際の戦闘においては安易な「無条件反射」論のような抗戦活動はありえず、「普及」に名を借りた人民大衆に対する愚民政策は必ず破綻すると説き、より高度な質を目指す文化活動こそ、真の普及の基礎だと主張した。

当時中国は「国民総動員」体制に突入しつつあり、単純でわかりやすいスローガン的抗日作品が大量に生産されていた。胡風はその単純反復の没個性的な文化を批判していた。そこには胡風の文芸思想である「主観の戦闘性」が欠如していたのである。しかし郭沫若らからすれば、当面する抗日戦時体制にすべてを集約する事が急務であり、国共両党合作の国民政府とその指導下の中国軍の輝かしいイメージの構築が文芸活動の主要な任務とされていた。つまり現実の政府と軍の問題点を抉るような複雑な文学ではなく、明快な抗日の思想を喧伝する英雄主義的民族主義的作品が望まし

かったのである。これは前節で見た重慶新聞界の状況と完全に一致している。ここで大切なポイントは、郭沫若の論調が彼個人の立場を超えているということだ。重慶国民政府の重職にあった郭沫若は、共産党中央直属の秘密党員でもあった。[12] 胡風はこういう関係を、友人を通して知っていたと思われる。郭沫若の見解が即共産党の正式見解とまではいかないとしても、共産党中央と指導部ブレーンたちの傾向を物語っていることは、胡風には明らかなことだったである。

この論争の経過も実は不可解な展開をしている。郭沫若が三八年一月に口火を切った後、胡風は同年六月から九月に三篇のエッセイを発表した。これに対して、郭沫若は三九年九月に「無条件反射についての解説」という反論を書き、胡風を名指しして激しい批判を加えた。胡風は公式な反論を控えたが、後に郭沫若は心理学者と編集者から前掲論文の用語上の誤りを指摘され、「無条件反射の訂正について」という書簡形式の文章を発表した。そこには郭沫若がパブロフの用語を間違って引用したから謝して訂正したいという旨の内容が書かれていた。胡風はこの書簡を「持久戦中の文化運動を論ず」の一資料として掲載した後、郭沫若をそれ以上は追求せず、「解釈幾句」という後日談のような文章を残してこの問題に決着をつけた。この間の事情についてはっきり記載しているのは、当時出版された胡風の第三評論集『民族戦争と文芸の性格』単行本のみで、後年の胡風文集、郭沫若全集のいずれも、この経過がわかるようには掲載していない。ちなみに、郭沫若が論文と書簡を寄稿したのは前出の孔羅蓀の編集する「文学月報」であり、当時の孔羅蓀の文壇における高い地位がよくわかる。

ここから読み取られることは、郭沫若の政治的な力が当時相当強かったという点と、胡風が意識的に論争を中止したように思われるという点である。結果的には、共産党の統一戦線政策が圧倒的なパワーで推し進められていったのだ。左翼文学者胡風は共産党の政策の支持者としてアピールする道を選んだともいえよう。当時の重慶は左翼文壇に、有形

無形の差こそあれ、こういう選択を迫っていったと見てもいいだろう。

ところで当時の胡風には、他の文人とまた違う意味の思想的立場の問題があった。それは、中国共産党の統一戦線線政策に大きな力を及ぼしたコミンテルンとスターリンのアジア政策にも関連することである。胡風が当時「中国のルカーチ」と言われていたことは周知の事実であり、実際、彼の「主観戦闘精神」にはルカーチの大著『歴史と階級意識』の強い影響があった。しかし一九二七年に世界に先駆けて日本語に訳されたこの書は、すぐにコミンテルンの激しい批判にさらされ、三四年にはルカーチ自らこの書を否定した。ルカーチは「極左的主観主義」を自己批判し、スターリンへの帰依を表明するのである。それにもかかわらず、四一年には「トロツキスト」の嫌疑を受けて逮捕されることになるのだが、ここには権力を集中的に握っていくスターリンの姿が明白に現れている。この当時、「極左的主観主義」は「反スターリン主義」と認定され、いともたやすく「トロツキスト的傾向」として断罪されていったのである。こういう事態を前に胡風は、前にも述べたように、誰よりも強く、トロツキスト的思考と彼自身が無関係であることを力説する必要があったのだ。[13]

この時代、「トロツキスト」は「反革命」と「裏切り者」の代名詞として定着しており、国共合作の重慶政府のもとでさえも、反トロツキストの論調や記事は極めて激しいものだったのだ。たとえば、一九三八年三月のブハーリン事件では、「新華日報」は「裏切り者トロツキスト・ブハーリン一派」の「卑劣な行為」と「ふさわしい末路（連座十八名の銃殺）」を連日大きく報道し、彼らが「日本軍部の金で動いていた」という記事さえ載せていた。[14] トロツキストは日本侵略者の回し者という単純明快な図式も出来上がっていたのである。単純な図式化といえば、当時は国民党との統一戦線政策と「国民総動員体制」に意見を言うことも、その延長線上に簡単にまとめられてしまう危険性が強かった。それはすなわち共産党の基本政策に反対することであり、ひいてはコミンテルンとスターリンの見解に反対することと見

なされて、トロツキストと同じ「反革命」の立場に結びつけられていくのである。こういう流れを想定してみると、はじめて郭沫若の語った「非国民的態度」「利敵行為の嫌疑」などという聞きなれない言葉が際立ってくる。これは中国語の文脈ではなく、明らかに日本語的な用語である。日本語を自由に操れる者だけが、この語のもつ「恐ろしさ」を知っているのだ。そしてこの当時、中国の文壇では、郭沫若、郁達夫、茅盾、夏衍などをはじめとして、日本語の文章に慣れた知識人はとても多く、慶應義塾大学に学んだ胡風の日本語力も相当に高かった。郭沫若の最初のエッセイが誰に向けて書かれていたのか、胡風は正確に察知していたと考えてまず間違いはなかろう。

阿壠の「南京」は胡風の「主観戦闘精神」と「戦闘的現実主義」を見事に作品化したものといって言いのだが、同時に、当時の郭沫若らの路線からは大きく外れた作品で、共産党の統一戦線政策に一石を投じてしまう恐れすらあった。優れた作品であるだけに、その政治的危険性も大きかったのである。

こう考察していくと、思想的立場の表明が一人胡風のみの問題ではなく、すべての左翼系知識人にとっての試金石であったことが容易に理解できる。統一戦線政策と「国民総動員体制」を支持するか否か、これは直接トロツキストの嫌疑に関わる問題だったのだ。それは一種の言論の統制でもあり、独裁的官僚的な政治体制の始まりという性格も秘められていたとしても過言ではない。魯迅生前に闘われた「二つのスローガンをめぐる論争」の真の意義が、悲劇的な形でここに展開していた。

＊　＊　＊

ここまで見ると、阿壠の「南京」を受け取った時、選考委員会を襲った混乱の意味がわかってこよう。選考委員会のメンバーはその知性によって、「南京」の非凡な達成と作者の文学的才能をよく見抜いていたのだが、同時にこの作品の底流に非常に危険な因子が潜んでいることもわかっていた。厳封されていた「南京」の作者名を開けるよう孔羅蓀を

衝き動かしたのは彼の「好奇心」などではない。一種の自己保存の本能が高級編集者孔羅蓀を動かしたのだろう。それは単に彼一人のためではなく、選考委員会全員の安全のためでもあったはずだ。賞金四百元を二人に与えて、公募自体をキャンセルするという決着は、彼らの苦心の妥協策だったと見ていい。その後陳瘦竹の『春雷』だけが出版から上演まで順風満帆の道を歩むのに対し、明らかにそれよりも文学的には上だった「南京」がまったく日の目を見られなかった理由も明白だ。当時の文芸政策に沿った作品は直ちに出版され、そうでないものは敬遠されたのである。

歴史的な意義のあった長編小説「南京」を葬ったのは、こうした国共連合政権の「国家総動員体制」と膨張しつつあった権力の影に萎縮していく左翼知識人の自己規制、自己検閲の姿勢だったのではないだろうか。これはその後の中国文壇を襲う影であり、数々の粛清の悲劇を暗示する事件でもあったのだ。胡風の悲劇も阿壠の悲惨な最期も、このときにすでに宿命的に育まれていたのである。

注

(1)、拙論に「阿壠南京とその問題点」(藝文研究56、一九九〇・一)、「阿壠詩論について」(北陸大学外国語学部紀要1、一九九二・一二)、「阿壠に見るタゴール受容の分岐」(藝文研究65、一九九四・三)、「阿壠の四十年代における特異性に関する考察」(日本中国學會「日本中国學會報」51、一九九九・一〇)、"A Verbose Silence in 1939 Chongqing" (Ken Sekine, Modern Chinese Literature and Culture Resource Center. http://mclc.osu.edu/rc/pubs/ sekine.htm upload/02Sep.2004) がある。また「南京」は『南京慟哭』(拙訳、五月書房、一九九四・一一)として出版されている。孫玉石の評価はじめ、中国内の阿壠評については、「阿壠の四十年代における特異性に関する考察」を参照されたい。また YunzhongShu の阿壠論は *Buglers on the Home Front: The Wartime Practice of the Qiyue School* (Albany: SUNY Press, 2000) に詳しく述べられている。

(2)、「阿壠年表簡編」(耿庸著、羅洛編、新文学史料、二〇〇一年二期)による。これまで明らかにされていなかった阿壠の

経歴が補完されている。

(3)、『胡風回憶録』（胡風著、人民文学出版社、一九九三）、邦訳『胡風回想録』（南雲智監修、論創社、一九九七・二）「南京」に関しては邦訳二六八～二六九頁。

(4)、『胡風伝』（梅志著、北京十月文芸出版社、一九九八・一）「南京」に関しては四三五頁。

(5)、『葱與蜜』（緑原著、三聯書店、一九九五・一二）所収「記阿壠」

(6)、陳瘦竹（一九〇九―九〇）は本名陳定節、江蘇省無錫出身。国立武漢大学外文系卒。南京国立編訳館をへて、戦後は国立中央大学（南京）教授、江蘇省文聯副主席など。

(7)、『抗戦時期的重慶新聞界』（重慶日報社編集発行、一九九五・八）

(8)、「中央日報」一九三九・九・二四「文芸専刊」に胡風の文章「時代現象について」が掲載されている。

(9)、この項で扱っている新聞は、郭沫若主幹の「救亡日報」広州版。「中央日報」の「ソ連紀行」は、陳祖東の署名で一九三八・九・一七から一二・二〇まで連載された。

(10)、『生きている兵隊』は「中央公論」に一九三八・一・一八に発表され即日発禁となったが、中国では夏衍によって直ちに翻訳され、同年「大美晩報」に発表された。『麦と兵隊』も同年、上海から翻訳出版されたという記録があるが、翻訳者と出版社は未詳。関係する胡風の回想は邦訳一五九～一六〇頁。

(11)、この項で扱う郭沫若胡風論争関係資料は以下のとおりである。

「郭沫若関係」：①一九三八年一月、郭沫若「抗戦と文化問題」（「自由中国」第三期、後に「羽書集」所収、「郭沫若全集第18巻」所収）②一九三九年六月二九日、郭沫若「無条件反射の解説（無条件反射解）」第一原稿、（「文学月報」第七、八期両期合刊号に掲載、郭沫若全集未収）③一九三九年一〇月一〇日、郭沫若「『無条件反射の訂正』について（関於「無条件反射」的更正）」（郭沫若書簡、胡風評論集「民族戦争と文芸の性格」所収、郭沫若全集未収、）④一九四〇年六月二七日、郭沫若「無条件反射の解説」第二原稿（「羽書集」所収、郭沫若全集第18巻所収）。

「胡風関係」：⑤一九三八年八月、胡風「持久抗戦中の文化運動を論ず」その一、「我々は何を獲得したか」⑥一九三八年九月一六日、胡風同右、その二、「文化の中心の問題について（関於文化中心問題）」⑦一九三八年九月二六日、胡風同右、その三、「普及も向上も必要（要普及也要提高）」初出は「国民公論」一九三八・一〇⑧一九四三年一月二二日、胡

風「解釈幾句」＊右記胡風「持久抗戦中の文化運動を論ず」三編（⑤⑥⑦）と解釈⑧、および②と③は胡風評論集「民族戦争と文芸の性格」（一九四三年桂林）に掲載。ただし、胡風全集には⑤⑥⑦の三編のみ所収）。なおこの項に関する胡風の回想は邦訳二九六頁。

(12)、秘密党員に関する記述は、呉奚如の回想記「我所認識的胡風（私の知っている胡風）」（『我與胡風（私と胡風）』曉風主編、寧夏人民出版社、一九九三・一、所収）に基づく。

(13)、胡風はルカーチ自己批判後の論文「物語か叙述か」を「七月」に呂熒訳で掲載し、その後記でルカーチの「創作における世界観の役割」否定論を純粋に認識論的な「解釈と理解」の問題だとして論じた。これを Yunzhong Shu の前掲書は胡風自身に向けられる「極左的主観主義」批判に対する防衛的論法だとしている（*Buglers on the Home Front* pp.101-103）

(14)、「新華日報」は「右派トロツキスト派同盟の売国行為――ソ連が国際陰謀機関を逮捕」という標題で三月一日に報道したのを皮切りに、以後ブハーリン処刑を伝える三月一七日まで、毎日大きな誌面を割いて「反トロツキスト」のセンセーショナルな報道を展開した。一三日には延安の「反トロツキスト運動」、一七日には「陳独秀はトロツキスト売国奴か」などの中共内の問題に触れる記事もあり、こちらは二〇日まで散発的に続いた。